
虹の閃光

蒼際

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の閃光

【Zコード】

Z5601A

【作者名】

蒼際

【あらすじ】

昔に地球を訪れた宇宙人が残したディスクを基に作られたオーバーテクノロジーの塊・ASGガンアークを妙な経緯で乗る事になった浅見勇の話。

プロローグ

遠い昔……まだ人類がサルだった頃に、宇宙人がやつてきました。宇宙人はサルだった先祖に希望を見出して、オーバーテクノロジーと呼ばれるデータサンプルと理論を小さなディスクを残してきました。

やがて、人類は進化を重ねては技術力を得て、知識を得ていきました。

そして、ディスクの読み取りに成功したある科学者は、人型高機動兵器を完成させて、ある事実を知りました。

この無限で広大に広がる宇宙のどこかには、人型兵器をサポートする超長距離狙撃型機動衛星の存在に気付き、初めて自分は愚かな事をやつたと後悔しました。

もちろん、破壊を試みたが、破壊は出来ませんでした。

そして、どこかの格納庫に封印して、科学者は念のために、自らの体を遺伝子操作を行い、動かせる存在を自分だけにして、悪用されないようにしました。

もちろん、ディスクは兵器の中の深層部に埋め込んで、見つからぬないように隠蔽しました。

そして、進化した人類は、大規模な戦争を始めて、地球だけでは狭すぎると考えて、宇宙に進出してきました。

現在では、勢力は大きな3つになり、『連合』『帝国』『中立』の三つ巴の戦争に展開されています。

宇宙に展開している連合に対し、地球を中心に展開している帝国。

その双方と停戦協定を結んでいる最低限の平和な中立。

戦争を始めてから、30年の月日が経過した頃の物語である。

人型高速機動兵器は通称・アーケシリーズと呼ばれていた。

マニュアルには、ただ数文字だけ……『ASG ガンマーク』

1話 ガンアーク

世界暦0093年の中立・第沿岸13地区。

俺は、いつも通りに海を眺めながら、バスに乗っている。

名前は『浅見勇』で、今日は親父の父にあたる人の家に呼ばれているので、バスに乗っている訳で、好きで海を眺めている訳ではないのだ。

殺伐とカツトされた黒い短髪は、前髪の一部だけ伸びていて、季節は夏なのに、薄い長袖のジャンパーを着用している。

たまに、変人だと、他人に思われないかを心配している今日この頃だ。

舗装道路を走っているはずだが、今日はやけにバスの車内が揺れる。車内が揺れるたびに、肩が揺れる。ついでに前髪も。

走った距離で変わる運賃を表す画面は、すこしづつ運賃を刻んでいく。

走った距離で変わる景色は、次第に何もない、海だけが広がつていいく。

不意に、車内を見回してみる。

帽子を被った老紳士、ゴルフバックのような入れ物を担いでいる黒いサングラスを掛けた男性、新聞を読んでいる若い女性といった。実にバラエティー豊富な人々が乗車している。

豊富過ぎて、逆に怪しい気もするが……触れない神に祟りなしだ。視線を逸らすように、窓の外に広がる海を眺める事を決め込む事にした。

しばらく、走つていった先には、終点らしき標識が見える。

そろそろ、バスから降りる頃なんだろう、と、俺はそう思いながら、運賃を払つてバスから降りる。

何もない田舎だと、不意に思った。

田んぼと畠しかない地味な風景だけが、延々と広がつていて、

の『ド田舎』だ。

「りやあ一面倒を押し付けられたかな?」と、親父に不満さえ感じる程の風景だった。

勇は頭を片手で搔きながら、住所と地図が書かれた紙を見ながら、地図通りに歩いていく。

何もない畠だけの風景を歩いていると、何だか周りの風景と微妙な摩擦を感じる現代風の設計の建物が建てられている。

何だが、豪華に感じてしまうのは、きっと周りの風景の性だろ?。いや、絶対にそうに違いない。断定しよう!断言しよう!-

入り口の和風の扉の脇にあるアラームを鳴らすためのボタンを軽く押す。

『ピンポン』と気が抜けるアラーム音……本当にミスマッチ過ぎる。

呆れながら、玄関の前で待っていると、和風の扉が内側から開かれた。

俺の視界に入った人物は、髪は白髪で、見た目は60歳前後で、どこにでも居そうな爺ちゃんだった。

こんな家をこんな田舎に建てるモノだから、変人を期待していたのだが、普通だった。

「こんな田舎に来る客は、息子しか居ないのだが……」

「ああ、俺は浅見勇と言つて、ここに来たのは親父の代理であつて変人ではないぞ!？」

はい?と、俺の最後の言葉に首を傾げる老人は、不意に何を思いついたのか、

「あいつの息子か?……全く、整備の手伝いを逃げあつたな」

老人の話はまだまだ続く、

「まあ、いいじゃんつ……そつ言つ事だから、早速だが裏山に行こうか」

老人は名前を明かす事なく、淡々とした口振り短く言つ。どう言つ事だよ、と、疑問を感じるのは言つまでもない。

結局、俺は名前も知らない老人に連れられて、家の裏の裏山に強制連行される。

裏山をすこし登つた場所に、異様とも思われるシェルターのような入り口が出現する。

扉は古い割には、開け閉めはカードキーで行うというハイテクな技術を使用している。

老人はさらに扉の先の階段を下つていく……ここで逃げたら、何か災いが降り注ぐ恐れがあると見た俺は、黙つて老人の後を追う。灯りと言えば、左右にボンヤリと光っている発光型電灯だけだろう。

薄暗い階段は、踏み外しそうにはなるが、気を付ければ何とか降りられた。

そして、景色が突然変わったような錯覚を覚える程の、光景が視界一杯に広がった。

大きな格納庫に大きなモノを外に射出するためのレール上昇型ハンガーにレール。

「ここはな、わしが昔使っていた研究所にもなつとる。これから整備をするのはこの先にある」

意味深げな老人の口振り……まだ、こんな珍しいモノがあるのかという、変な期待を持たされる俺である。

使い方もわからない機械やローター式端末などを通り過ぎながら奥に向かつて歩いていると、厳重そうな重苦しいドアが目の前に現れた。

老人は馴れた手つきで、端末にカードキーを通して、パスワードを片手で手早く入力した。すると、ドアは自動式で開かれる。

「この先じゃよ」

老人は短く、そう言つと、一歩横に立ち退いて、俺の背中を片手で押す。

押された俺は、一步か二歩程前に前進する……眼前に映つたドア

の向こうには、大きな機械がハンガーに固定されて、直立に立っている。

左右の肩には見た事のないウイングが設置されていて、頭部モーターは一つ目で、胸部のすこし前に突き出た真ん中から見た左右には、排気口のような穴が斜め下に向いている。

真っ白な機体は、俺の目の奥にまで、焼きついたようだった。

両の瞳が大きく見開いて、呆気にとられた。

「これは、『ASG ガンアーク』という機体じゃよ。ASGはアーチシリーズガンの略でな、昔に作った過去の產物じゃよ」

「過去の產物？」

「そうじゃ。昔のわしも若かつたからな。やつてはいけない事を理解出来なかつたんじゃよ……だが、それなりにコレには愛着があるがな」

引き攣つた笑みを浮かべながら、老人は話ながら真っ白な機体に向かつて歩き出す。

「アーチシリーズって事は、他にもこんな機体があるのか？」

「さり気なく、俺は老人に訊ねる。

「あるが、ここはない……アーチシリーズは全部で、ガン、バスター、アナザーの三機種存在するのだが、完璧なアーチシリーズはこのガンアークだけで、残りのバスターとアナザーは愚かなワシの仲間が作つた模造品じゃよ」

「じゃあ、この機体にはスペックで負けているのか？」

俺の言葉に、老人は首を左右に振つて、

「スペックでは、多分バスターやアナザーの方が今はこのガンアークを抜いているだろう。ただ、ソーディアンを扱えるのはガンアークだけで、基本的な操縦精度もガンアークがまだ上じやろう」

わかつたら整備を手伝え、老人はそう言うと踵を返して、機体の足元の端末のスイッチを押して、端末を機動させる。

手伝えと言われても、俺にはこの辺りにある機械の操作はサッパリなので、

「どうやって手伝えばいいんだ?」

老人に訊いてみた。

「機体の足元にリフトがあるじゃろ? そのリフトに乗つて、ガンアーチに搭乗すればいい」

端末を目にも止まらぬ速さで、何かを打ち込みながら老人は簡単に説明する。

老人のその説明なら、馬鹿な俺にも理解しやすく、言われた通りにリフトに乗つて、胸部のコックピットに乗り込む。

だが、コックピット内の細かい機械は、サッパリだつた。

俺は適当に、左右の肘掛に付いている丸い球体の上に両手を置いた。そして、いきなり丸い球体が光り出した。

その瞬間、両手が火傷でもしたように、熱くなつて、ヒリヒリする。

すぐに球体から手を放して、手のひらを確認したが、何の変化も見えない。

だが、このヒリヒリした感じは、火傷にしか思えないが、火傷していない。

ここで、突然、

『ガンアークの機動は確認した。とりあえず、降りてきていいぞ』
コックピット内に老人からの通信が入り、俺は素直に聞き入れて、ガンアークから降りた。

だが、あの感覚は何だったのだろう? という疑問を感じながら、俺と老人は裏山から家へと帰つていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5601a/>

虹の閃光

2010年10月11日13時26分発行